

---

# けいおん！ .....なの？

koryuu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん！……なのか？

### 【Nコード】

N3771BA

### 【作者名】

koryuu

### 【あらすじ】

一人のビギナーギタリストが、『けいおん！』の世界に飛んでしまいう話です。……転生ではありません。

（ない頭で考えたので、もし展開が似ている小説があっても気にしないでください。これは、一応自分のオリジナルですので）

1 廃部！ …… するのか？

ピリリリッ！ ピリリリッ！

「ううん……」

俺は、着信音で叩き起こされる。時刻は九時。日曜日の朝だ。

「もしもし……」

『練習やるぞー！』

「……………うるさい」

電話から聞こえてきた、やけにハイテンションの女子の声に耳を押さえ、相手に聞こえないよう小声で毒づいた。最悪な目覚めだよ。つたく。

1 廃部！ …… するのか？

『練習場所はいつもの所。早く来いよ。ああ、あと、泊まりだからじゃな』

電話がきられる。

「いきなりだなあ。じゃ、ギターギター」

俺は優。美旗優だ。ギターを始めて一年も経ってないビギナーだけど、バンドを組んでいたりする普通の少年。

「行ってきまーす！ って、誰もいねえけど」

ちなみに、父子家庭だったりする。

ヴォン……！ ヴォン……！

「さーて、行きますか」

リュックとギターケースを背負い、エンジンをかける。バイクのではない。もちろん車でもない。コンのスケボーとスノボーを足したようなやつだ。その名も“エアライダー”。何故“エア”とつくのかは、今説明できない。どういう技術か知らないの。その機能を使ったこともないし。

「イヤッホーウ！」

車道を軽快に走る。ちなみに、歩道での使用は禁じられている。エンジン付きということもあり、バイクと同じ扱いだからだ。当然免許もいる。

「ちえ、混んでるな」

渋滞気味なので、裏道を通ることにする。ここら辺は俺の庭みたいなものだし。最短ルートはすぐ分かる。

「いつもながら揺れがひでえな」

住居地区の細い路地を、最大速度で走ってゆく。人が飛び出したら危ない、と思うだろうが、ここではこうしないと逆に危ない。何故なら

「ううわああああああああ！」

一気に視界が開けた。そして、浮遊感。そう、道がないからだ。俺が生まれる前は、まだ住居地区だったらしいが、地震で地盤沈下を起こし、住宅の大半が巻き込まれた。道の整備はしづらいが、この地区は危険だと認定され、取り壊しすら行われていない。何しろ、地面が宙に浮いてる箇所が結構あり、瓦礫も半分は片付けられていない。スピードを落としての走行だと、絶対瓦礫に着陸してしまうのだ。だから飛び越えるしかない。

「ヒヤッホー！」

そんなこんなで、俺は今空からゆっくり落ちてる最中だ。ここでバランスを崩すと、あっという間に瓦礫に突っ込み、ジ・エンド。だから体重移動に細心の注意を払う。その時にはいつも下を見ているので、異常に気付けなかったのだろう。

「……へ？」

いつの間にか、青に金の粒が混ざったようなトンネルに入り込むという異常に。こんなもの、さっきまで無かったし、無論いつも無い。

「え？　嘘？」

慌てて辺りを見回す。それがいけなかった。トンネルに入ったと

いつでも地面は無く、俺自身は空中に浮かんでいたのだ。支えは勿論無い。だから、呆気なくバランスを崩す。

「ぎゃあああああ！」

足が留め金から外れ、ギターとリュックが背から離れ……。

『それは絶対嫌ああ！』

トンネル内でぐるぐる 洗濯機の如く 回りながら、俺は女の子の声を聞いた。……気がした。

ホワイトアウト。

? side

「4月も後、一週間……」

そう呟くのは、前髪をカチューシャで上げた、活発そうな女の子。彼女の名は、田井中 律。

「誰も来てくれませんね……」

落ち込んでいるような響きの声の主は、金髪で、世間知らずの大人しいお嬢様のような気品を醸し出している、琴吹 紬という女の子。

「バンドも組めずに廃部か」

そんなことを淡々と告げるのは、黒髪が美しい、美人の分類に入る女の子。彼女は、秋山 澪。彼女達は、私立桜ヶ丘高校の一年生で、軽音部に所属していた。……その軽音部は、部員が四月までに入らないと廃部してしまう、崖っぷちの状況にあるのだが。

「それは絶対嫌ああ!」

律の悲痛な叫びが、音楽準備室で虚しく木霊する。

『嘘?』

……誰かの言葉と共に。

「……今の声は……?」

「も、もしかして、ゆゆ、幽霊?」

「ひい! (泣)」

絢が一番最初に気付く。律と澪は、ある可能性を想像したあげく、抱き合って怯えていた。そして。

『ぎゃあああああ!』

「「「きゃあああああああ!」」」

正体不明の叫び声（悲鳴）で、恐怖心が最高潮に達してしまい、最大音量の悲鳴を上げる三人。同時に腰を抜かしていた。それが良かったのかもしれない。何故なら

ドダアアンッ！ …… ガターン！

何かが、ホワイトボード目掛けて飛んできたからだ。横向きに。その何かは、ホワイトボードに激突して床に倒れ、その衝撃でホワイトボードも倒れる。その何かに覆い被さるように。……音楽準備室から逃げたそうとしたなら、間違いなく巻き込まれたであろうタイミングだった。

優side

ドダアアンッ！

「ガッ……！」

俺は、何かに背中から激突した衝撃で意識を取り戻した。そのまま重力に従って落ちる。

（床……？）

それを認識した直後、何かが俺に倒れかかる。

ガターン！

「ぐえっ！」

背中痛みで、どうしても立ち上がれない。だが、どうも瓦礫に突っ込んだ訳ではなさそうだ。ギターケースをいつの間にか抱えて



いたようだが、ダメージ受けてないだろうか……。

「つて、ギター！」

慌てて立ち上がり、ギターケースを開ける。

「……良かった。どこも壊れてない」

ギターが無事だったので安堵する。さて、辺りを見渡……

ボスッ！

「むごっ！？」

何かが顔面に当たる。見ると、俺のリュックだった。……その時、俺が気づいていたなら、まだ帰れたのかもしれない。青いトンネルが、徐々にしかし確実に消えていっていたことに。だが俺は、暢気なことに、背中 of 痛みに気を取られていた。

「……あゝ、まだ背中が痛え」

背中 of 痛みを思い出し、さす

ズゴッ！

「……ッ！？」

ろうつしたら、腹に何かが突っ込んだ。悶絶しながらそれを見ると、エアライダーだった。

「だ、大丈夫？」

まだ悶絶してる俺に、誰かが声をかけてきた。そちらを見ると、  
同年ぐらいの女の子三人。制服ということは……。

「ここはどここの学校ですか……？」

そう質問するのが限界だった。俺はまた意識を失った。

濡Side

ホワイトボードにぶつかつた若い私服の男性は、ギターを確かめた直後にリュックとスノーボードに激突され、悶絶している。

「何、この状況」

正直、運のない人だと思う。それでも、幽霊ではないことが分かり（不審者だけど）、正気を取り戻した私達は、その男性に近づいた。

「だ、大丈夫？」

恐る恐る声をかけてみる。すると、男性はこちらを向き一言。

「ここはどここの学校ですか……？」

それだけ言うと、気絶してしまった。

「……どうします?」

ムギが訊いてくる。私も、部長である律を見た。

「へ? 私?」

慌てる律。その時だ。上から何か落ちてきたのは。

「……ピック?」

「……アクセサリー?」

「……ラピスラズリ?」

「いや、それはないだろ!」

それは、青に少し金の混じった三角形の物体。ていうかムギ、宝石は流石にないでしょ。見れば男性の頭の上にも同じ物が落ちていた。

「……これからどうする?」

律の言葉で、今の状況を思い出す。

……結局、長椅子に荷物を置いて、後は放置する事になった。校長先生もお呼びした。今の所不審者だし、もし危険人物であれば……なんて事も考えられるからだ。で、校長先生がこちらに来られる数秒前に男性が起きた。

……俺は今、校長室にいる。気がついた直後に連れて行かれたのだ。ここに来る途中、何か記憶に引つかかるような光景を見たのだが、校長先生に学校名を聞いて氷解した。何故か、“けいおん！”の世界にいるのだ。夢か幻か、はたまた奇跡なのか。……だとしたら迷惑だし、原因は分かる。謎のトンネルだ。正三角形の石と同じ色をした。むしろ、この石がトンネルの欠片じゃあるまいか。……訳が分からなくなってきた。

「……というわけです。自分でも何が起きたかサッパリで……」

取りあえず校長先生には、今分かる事を全て話した。この世界が、自分の世界ではアニメとなっていること（コミックにもなっているが）。ここに来る直前までの記憶。謎のトンネル。……話している内に頭がこんがらがったため、校長先生は更に分からなかっただろう。はあ、俺はこれからどうなるのだろうか。

「……分かりました。君は行く当てがあるかね？」

「……行く当て？ いえ、当たり前前に無いですけど……」

「では、当分学校に泊まり込みたまえ。帰れる日が来るまで、この学校に通ってもらおうから」

何、この展開は？

「ここ女子校でしょう！？」

「……その女子校はそろそろ共学に転向する事を考えていてね。私は、男子生徒が居たらどうなるかのシミュレートが出来る。君は勉強する事が出来る。高一なのだろう？ 今後のためにも、勉強する事は大切だ。……どちら也得をするとは思わないかね？」

「……こんな問答を繰り返した結果、言いくるめられてしまった。でも、普通はこんなことあり得ないよな？」

一日後。制服が出来上がり（校長は本気だったようだ。つか早すぎ）、晴れて俺は、私立桜ヶ丘女子高等学校に入学する事になった。……晴れてじゃねえー！俺は一体どうなるの？

全校集会で紹介され、一年三組に編入されてから、好奇心の視線が絶えない。三年生にまで見に来られる始末。唯一逃げれるものが音楽のため、放課後は音楽室に籠もることにした。直前で足を止めることになったが。主人公の平沢 唯が音楽室の前で怯えていたのだ。そして律が、その唯の肩に手を置く。

「……すげえな」

怯えっぷりが半端じゃねえ。

「あ、もしかしてあなたが平沢唯さん？」

「は、はいっ」

「入部希望の！」

「は、はいっ」

律が唯の手を握る。

「いろいろ誤解しててごめん！ ギターがすっごくうまいんだよね！？ 来てくれるの待ってたよー！！」

そのままはしゃぐ律。

「みんなー！！ 入部希望者が来たぞー！！」

唯を連れて部室へと入っていった。

「……やっとな音楽室が使える」

音楽室へ入る俺。

「ギターギターっ」と

ギターケースを開けて、俺の相棒を取り出す。ピアノブラックに、二本パールホワイトの細い線が入ったギター。ネックが細く、軽いを選びに選んだ事を今でも覚えている。アンプを探すのに手間取り、やっと見つけたと同時に、“翼をください”が聞こえてきた。

「……」

演奏が終わるまで待つ。それから、“月夜”と名付けたオリジナル曲を、一回だけ弾いた。

律 side

「私、この部に入部します！」

その言葉を聞き、私は頬をつねる。 漣の。 漣も私の頬をつねる。  
……痛い。夢じゃない！

「バンザイ！」

廃部じゃなくなる！ あ、そうだ。

「ちょっとしつれーい」

漣の鞆から、カメラを取り出す。

「じゃあ、軽音部活動開始記念に」

ムギが移動したのを待ち、カメラを構える。

「あ、私のカメラ」

漣が何か言ってるけど気にしない。

「いっくよーん！」

シャッターをきる。

「あ……でも私全然楽器出来ないし……。あ！ マネージャーとか

「どうかな!？」

「いや、運動部じゃないんだし」

つつこむ。ギターは絶対にいる。

「そっだ! この機会にギターを始めてみたらどうかしら?」

ムギ、ナイス!

「で、でも、すごく難しそうな……」

「大丈夫だよ。私達も、分かるところは教えてあげるし」

退路を塞ぐ。

「そうだね。さっきの演奏聞いてたら、私にも出来るかもって思えてきた!」

「……それは良かった」

バカにされてる気が……ん?

「何か聞こえないか?」

少し前からギターの音が聞こえてくる。どうも隣らしい。全員で見に行ってみる。そこには、

「  
」



演奏している男子が居た。よく見たら、昨日の運がない人だ。それにしても、上手い。

「あれ？ あの人、今日入ってきた……」

唯が何か言いかけたところで、演奏が終わった。

優side

「……あれ？」

いつの間にか軽音部の面々が目前にいる。あ、思い出した。

「そつだ。石、返せ」

ポケットから取り出した、トンネルの欠片であろう石を見せながら言う。昨日校長室に行く前に澪が持っていたのを見ていたのだ。唯一の手がかりだから、保管しておきたい。

「……おい」

澪と紬が石を取り出す中、律だけがそっぽを向いたので、俺は声を掛けながら近づいてみる。

「ゴメンナサイ！」

いや、別に謝りながら出さなくてもいいんだけど……。と、俺の目の前にもう一つ手がさし出された。唯だ。

「……あと、一つかな？」

その四つを受け取り、形を見てみると全て三角形。円に近づくには一つ足りない。

「そ、そう言えば、今さっき弾いてたの、なんて曲？」

律が聞いてくる。少しよそよそしい響きを持っているのは、俺が男からだろっか。

「月夜　　Moonlit　Night」

「バンド名は？」

……聞いても分からないだろうな。

「Crown Crown」

何てったって、俺が所属しているバンドなんだから。

「……どんなバンド？」

訝しんでいる様子だ。ま、そりゃそうか。この世界では存在していない（多分）からなあ。

「男女混同で結成されている学生バンド。でも、この世界には無いはずだよ」

「「「「「……」」」」」

「はいそこ！ 頭のおかしい奴を見るような目をしない！ て言うか、お前ら三人は見ただろ！ ありえない所から飛んできた俺を！」

黙っていた方が良かったかもしれないけど、どうしても“おかしい人”と確定されるのはイヤだった。漣、紬、律の三人を見ると、律がこう言った。

「え？ 壁を通り抜けてきたんじゃないの？」

「俺は既に死んでいるのか、そうか分かった。……そこになおれ」

最後の一言に万感の思い（と言っても怒りだけ）を込めつつドスを利かせてみる。

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイちよつとしたジョークだったんですゴメンナサイゴメンナサイ」

後日この時のことを律に聞くと、殺気が俺の背後で渦巻いているように見えて、殺されると思ったと語っていた。

「ありえない所って？」

唯が漣と紬に小声で聞いている。俺には筒抜けだけど。

「部室に長椅子があるだろ？ あの前からホワイトボードに向かって飛んできたみたいなんだよ。どうも」

だから漣ー、聞こえてるってーの。

「隠れてたんじゃないの？」

「それが、あの人がボードにぶつかった後、荷物も飛んできたんだよ……」

「えー？」

もういいや、無視しよう。

「話を戻そうか。俺は、そのバンドのリードギターやっててね。この曲書いたのも俺なんだ……って、どうした？」

なぜか律が震えてる。

「……軽音部に入ってくれない？」

いきなりだな、おい。願ったりだけど……。

「別にいいけど、秋山さんがなあ……」

律の台詞で少し怯えた様子を見せる漑。そんな姿を見てしまったし、予想もできていた。

「ああ、漑は人見知りだからなあ……？」

何か違和感に気づいたようだ。うん、俺もすぐに気づいた。名前知らないはずの俺が呼んでしまったことに。

「……え？ 何で名前知ってるの!？」

当然のように驚かれる。唯を除いて。

「一応、この生徒になったし……。世話になったから、ちょっと他の人に聞いた……。んだけど……。？」

怯えてる澁や細が見えてしまった。怖がらせちまったな……。確かにストーカーにも見えたかもしれない。何か罪悪感。礼を言うためにって入れるのを忘れてたし。確かに怖えよな。

「ワ、ワリイ！　じゃあな！」

ギター片付けて逃げる俺。できるだけ関わらない方がよさそうだ……。

昨日泊まった宿直室に帰る。後で校長先生に、バイトと部活ができるかどうか聞いてみないと。

翌日。校長先生に許可は両方とも貰ったものの、音楽を忘れられるかな？

「ええ！？　結局入部したんだ！？」

昼休み。一年三組なので、唯と和の会話も、聞こうと思えば聞ける。

「うん。どうしてもって言われて」

「マジで！？　……ああ！　マネージャーとして、とかね！」

「人に言われると何か悔しい……。ちゃんとメンバーとして入ったんだから！」

そんな会話を聞きながら、俺はパンを頬張る。うん。普通に美味しい。

「ギターーから教えてくれるって」

「へえ〜。あ。ということは、新しくギター買ったりするんだ」

「……貸してくれないのかな？」

「くれないんじゃない？」

（絶対貸してくれないな）

心の中で和に同意する。

「……五千円くらいで買えるよね〜？」

（どれだけ値切るのが巧くても、無理があるぞその値段！）

何か、この会話聞いてたら心配になってきた。

「あ！ そうだ」

と、ここで原作に無い台詞。イヤな予感しかない。

「借りればいいんだ」

「……誰に？」

うん、誰に？ 和と同じ思考に至る俺。

「えっと、確か……。優くんだけ」

ヤッパリ俺か……！！

「えー！？ あの人ギター持ってるの！？」

幸い、既に昼は食べ終わっている。俺はできるだけ静かに席を立った。それにしても、声がでけえよ和！

「あ、優くん！ って、あれ？」

逃走。ま、走ってないけど。廊下を走るの良くないし。ちなみに、昼休み後に視線が更に痛くなった。

放課後、また音楽室にいる俺。

「情けねえなあ、俺」

「何が？」

「うわああ！？」

「ひい！？」

いつの間にか、律と澪が近くにいた。

「ど、どうしたんだ？」

出来るだけ心を落ち着かせながら訊いてみる。

「軽音部に入ってくれない？」

「どうしても抵抗はあるだろ。……昨日はごめんな。で、ありがとう」

指摘しつつ、昨日の誤解を解いて見ることにする。

「世話になったから、礼を言いたくて。だから、名前を調べたんだ」

「そ、そうだったんだ」

どこかホツとした表情の澪。良かった。後は、関わらないようにするだけだ。話が別方向に飛ばないように。

「じゃ、俺は一曲弾いて帰るから。田井中さんも秋山さんも部活なんだろ？ 行かなくていいのか？」

そう言って、ギターの準備を始める。やっぱり俺は、音楽から離れられそうにない。けど、一線を引いておくだけでも違うはずだ。

「  
」

“月夜”を弾く。この曲のギターソロは、書いている内に何故か難しくなってしまう、数日もやってないと間違いそうになるんだ。



……演奏を終える。さて、帰るか。バイトも探さなきゃだし。

「すごい……」

「……じゃあ、せめて楽譜だ「けども、か？」冗談だよ、冗談」

つか、まだいたのな、お前ら。

「じゃあな」

自分の迷いからの決別の意味も込めて別れを告げる。これでいい。まあ、放課後ティータムの面々と演奏したいと言う願望がない、とは言えない。せつかくこの世界に来てるのだから。でも、だからと言って、アイツ等の物語を邪魔していいわけじゃないよな……。だからこれでいい。

……唯一の心残りは、残る一つの欠片だ。唯も持ってたから、多分山中先生か梓が持っているんじゃないかと思う。だとしたら、軽音部に入ることはメリットだらけで……。情けねえ。数時間前に決別したばかりなのに、まだ迷ってる。

「……チクショウ、自分がイヤになる」

夜。宿直室でブツブツつぶやく俺。自己嫌悪に浸りながら勉強したみたけど、全然力が入らなかった……。

1 魔部！ …… するのか？（後書き）

……えへ、一話完結です。

二話目はは、出来るだけすぐに投稿致しますので。今しばらくお待ちください。

2 楽器！……買える？

「唯」

「あ、和ちゃん」

「一緒に帰る」

「ごめん。今日どうしても部活に行かなきゃいけないんだ」

「そうなんだ、それじゃあしかたないね……どうしたの？」

「今日ムギちゃん、おいしいお菓子持ってきてくれるんだ」

「ギターやるんじゃないの？」

そんな原作通りの会話を聞きながら、ギターを取りに向かおうかな、と思う。あ、そうだ。バイトも探さないと。校長先生が援助を申し出てくれたが、できるだ世話になりたくない。心苦しいし。

「はあ、俺は無事に帰れるんだろうか」

憂鬱になるなあ……。

2 楽器！……買える？

「どんなのがいいかな」

結局ギターは夜静かにやることにして、今バイトの募集雑誌を見  
てる。

「交通量調査……。完璧、原作に被るから却下として。他に何か無  
いかな？」

ウェイター。これは保留だな。新聞配達員。朝は遅い方だから無  
理。薬局のレジ打ち。時給が少し安い。ライブハウスの手伝い。…  
…こんなものもあるのか。時間帯は薬局と掛け持ちできそうだな…  
…。この二つにするか。ウェイターってガラじゃないし。じゃ、ど  
うしようかな。今頃軽音部はお茶会の真っ最中だろうし……。うん。  
勉強だな。

そして、夜。

## 2 楽器！ …… 買える？（後書き）

途中で申し訳ありません。例によって続きは後日となります。

真に申し訳ありません。

…… お手数ですが、誤字脱字等がございましたら、一言でいいのでお知らせください。すぐに訂正しますのです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3771ba/>

---

けいおん！ .....なのか？

2012年1月13日17時54分発行